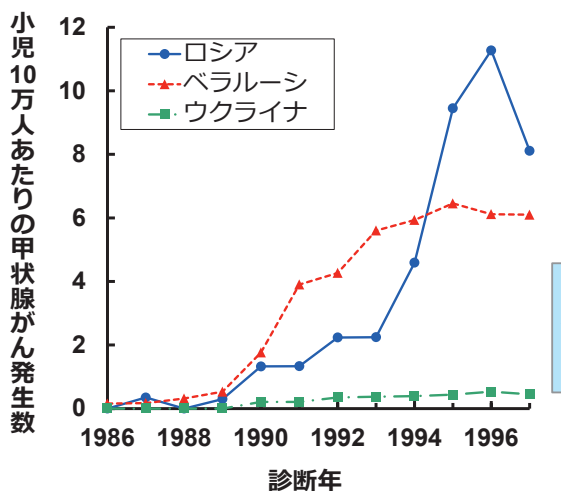


小児甲状腺がん（チェルノブイリ原発事故）



甲状腺

ヨウ素は甲状腺ホルモンの材料

事故の4～5年後に
小児甲状腺がんが発生し始め、
10年後には10倍以上に増加

出典：国連科学委員会（UNSCEAR）
2000年報告書より作成

チェルノブイリ原発事故では、爆発によって放射性物質が大量に飛び広がりました。その中で健康被害をもたらしたのは、主には放射性ヨウ素であったといわれています。

地上に降り注いだ放射性ヨウ素を吸入したり、食物連鎖によって汚染した野菜や牛乳、肉を食べた子どもたちの中で、小児甲状腺がんが発症しました。特に、牛乳に含まれていたヨウ素 131 による内部被ばくによって大きかったといわれています。

ベラルーシやロシアでは、事故後 4～5 年ごろから小児甲状腺がんが発生し始め、10 年後に 10 倍以上に増加しました（引用：D Williams, Oncogene (2009) 27, S9-S18）。

本資料への収録日：2013 年 3 月 31 日

改訂日：2015 年 3 月 31 日